琵琶機関紙
京絃
第二六八号　京絃社

薩摩琵琶とその周辺（八）

血涙共に下る乃木さんの詩＝幕末騒然たる中に東郷さんの出生＝恩師有馬新七の憤死＝生麦事件＝薩英戦争に東郷少年の初陣

東京　坂本錦道

乃木将軍に関する作詞は飯田胡春、酒井幽泉氏を始めとし、旅順開城の内容も大半乃木さんを謳っているようなもので、その他作詞者不明のものも五、六篇もある。将軍は元来情熱の人で、自作の漢詩も沢山ありその詩を通じて人柄を察すると、あの日露の役で御令息二人まで名誉の戦死をされ、そのことに関しては一語も語らず「山川草木」や凱旋にある「愧ず我何の顔あって父老に看えん、凱歌今日幾人か還る」等、その遺族を想い血涙ともに噴出する詩は、万人の肺腑を抉ぐる不朽の名作である。それだけ人々に親しまれたが、その人生の終末は御夫妻共殉死と云う最大の悲劇をもって一生の幕を閉ぢられた。

さて、陸軍の乃木将軍といえば、どうしても海軍の東郷元帥を挙げねばならぬ。元帥の性格というものは乃木さんと反対に冷々として、感情に走ることは殆んど少なく、あの日本海開戦に古今未曾有の勲功を樹てられ乍ら、何等勝ち誇ることもなく、「これ皆御威陵の致す所」と、淡々として沈黙の中にあり、政治等には一切介入せず、ひたすら職責を全うされた。強いて両者の共通点といえば、少年時代旧藩の下級武士の家庭に育ち、その当時の貧乏生活を忘れず終生一貫して質素な生活に甘んじていられた点であろう。

元帥の少青年期に於て東郷家に襲いかかった不幸な出来事というものは、之又冷酷無惨の一語につきる。元帥の出生は弘化四年鹿児島城下町の鍛冶屋町で呱々の声をあげた。この鍛冶屋町は維新の大立者西郷兄弟を始め大久保利通、大山元帥、黒木大将、篠原国幹、山本権兵衛、（乃木静子夫人もこの町の生）等々多数の人材を輩出した。元帥の出生弘化四年といえば、英米仏蘭露の列強の艦隊頻りに来航、幕末の物情騒然たる時である。元帥の話を進めるには、先づ横浜市鶴見区に在る生麦村に起った世に云う生麦事件（文久二年、明治を遡る六年前）より説き起さねばならぬ。

薩摩藩主二十九代島津久光は、父斉彬の遺志を継承しての公武合体論者であるが、藩中に於て尊王の烈士有馬新七等の同志が京都伏見の寺田屋に投宿中、彼等の持論とする過激な行動を説得するため奈良原喜八郎、大山格之助外数名を派して、充分納得のゆくよう藩主の胸中を説明することになった（若し彼等が服従せぬ時は斬れという密命を帯びていた）。案にたがわず彼等激派は服従せず、止むなく有馬新七外六名を斬殺した事件があった。この時点東郷平八郎少年は十五才で、後のことであるが元帥には恩師であった有馬新七先生の追憶の談話がある。（元帥談話集）

有馬先生は予が少年時代親しく教育を受けた恩師である。先生は文武両道の達人薩摩勤王の先覚者で、あまたの勤王志士と交り、幕府の専横と皇室の衰微を憤慨していられた。鹿児島城下西方三里の石谷に私塾を開いて育英に従事、予は先生の人格と名声を慕い親しくその教えを受くべく、毎日三里の道を短袴下駄ばきで通学して修養を積んだ。先生は文字通り剛直正行、尊王倒幕のためには水火をも辞せざる熱血の志士である。藩公の鎮撫に服せず勤王の義挙を急ぎ、遂に寺田屋事件で壮烈なる最期を遂げられた。誠に惜しい人であった。

さて茲で同藩同志の血で血を洗うが如く、激派を一掃して後顧の憂いを断った久光は勅使大原重徳に従って東下、将軍慶喜に対し二、

谷嚢水　小栗栖—原島旭粧　大楠公—藤巻旭鴻　曲垣平九郎—山崎旭萃　新琵琶楽黒田節—藤巻旭鴻外二十一人、立方二。

琵琶吟道演奏大会

八月二十九日(日)零時半札幌市中央区大谷会館大ホール、主催北海道神宮琵琶講、後援NHK外。川中島—本間進水　新曲白虎隊—草薙覚水　大楠公—川崎姿岳、荒木旭麗　小督—小野蓉水　鉢の木—広川岳楓　敦盛—加藤夕水　耳なし芳一—金子天香　茨木—山崎紅水　戦艦大和—中谷嚢水　新曲本能寺—内山鶴崇　外に吟詠四十三題。

京都琵琶協会九月定例茶話会

初秋晴れの九月五日(日)昼一時本部平井春嶺氏宅で開催。まづ何よりも嬉しいのは六月以来病気欠席中の会員古谷竟水氏が夫人同伴で思ったよりも元気で出席、又病後保養中の木村維水、伊吹正陽両氏も列席されたことで一同愁眉を開いたのは今日の大きな収獲であった。例により数氏研究演奏のあと①十一月十四日一水会京都支部と共催で秋の演奏会開催、②十二月十二日義士祭演奏会閉会に続いて附近の料亭で忘年宴会開催、③会員安住旭康女史斡旋の鳥取県湯村温泉一泊懇親会を不日実施などを協議、ビールの満を引いて夕食を共にし八時解散した。（出席者）伊吹正陽、馬場鴨水、戸倉旭嶺、田中鵬水、梅原旭濤、矢吹旭美津、安住旭康、山岡旭清、牧南水、古谷竟水、荒木旭媛、木村維水、水内爕水、平井春嶺、植村寞水、来賓瘧師兵蔵氏。

筑前琵琶追悼公演

九月五日(日)昼神戸市生田区県民会館九階ホール、主催柴田旭堂会、後援平家琵琶を聴く会。小田、中村、河野、小林、井上五故人の追悼慰霊会、旭堂会員の外神戸、東大阪、北大阪、相生各地の来賓出演で盛会であった。四條畷—宮村旭当　吉野山懐古—多田、酒井紘旭堂、旭冠　羅生門—近藤旭竜・旭堂、小紘旭楓　関ヶ原—叶旭峰・紘旭寿　壇の浦—植田旭洋・紘旭堂　四紘鳥の曲—九人合吟　二〇三高地—村山旭勢・紘旭晶、旭海、旭冠　斉藤実盛—巽旭悦・紘旭堂　広瀬中佐—国田旭純・紘旭堂　由井ヶ浜風—藤谷旭声、景山旭貴・紘旭堂　大高源吾—稲田旭晃　盲僧琵琶の幻想—竹内祥恵・紘九人　伏見の吹雪—武田旭城・紘旭堂、旭海外二、立方付　秋風故郷山—鎌田珠川、安藤旭慶・紘旭堂、小紘旭楓、立方付　巡礼お鶴—大籔旭晶　衣川—植田旭心・紘旭勢、旭冠　大楠公—高千穂旭楓　あゝ無情—四人・紘旭堂　若き敦盛（録音）—故中村旭詔、故河野旭棟　船守—池田旭柴、植田旭心、大籔旭晶・紘大籔旭寿　未練西行—橋本旭司　五條橋—空野旭陽、空野旭昭・紘旭堂　月に偲ぶ—松岡旭文、能勢旭陽・紘富樫旭柱　橋中佐—桝本旭風　小栗栖—会主柴田旭堂。終演六時五十分。

錦心流関西新進演奏会

九月十九日(日)昼大阪天神筋朝陽会館、主催一水会大阪支部長小川吟水氏。（次号詳報）

老人会慰問琵琶演奏

九月十九日(日)昼京都西大路小学校。学区内婦人会斡旋の老人慰問会。（次号詳報）

故吉野洲水氏追悼演奏会

九月二十六日(日)昼鯖江市民会館。洲水会・一水会福井支部共催。（次号詳報）

—（予告）—

○…京都琵琶協会十月定例茶話会　十月三日(日)昼一時、会員矢吹旭美津女史宅。

○…筑前琵琶大演奏会　十月十一日（振替休）十時半—十六時神戸市生田区相生町一丁目二七神戸市文化海員会館、主催田中旭昇会、後援兵庫県、神戸市外。田中旭昇会創立五十周年記念演奏会で会主田中旭昇氏を初め松岡旭岡、桝本旭風、浜本旭好、高千穂旭楓その他有名人多数出演、曲目二十五（琵琶舞踊、扇舞、茶、華道等八番付）。

○…都錦穂会秋の公演　十月十二日(火)夕五時半東京日本橋三越前第一証券ホール。会員の外錦心流、振誤会、大舘派、筑前の各流派名手協賛出演。

○…筑前琵琶旭会全国大会　十月二十三、四、五日門司市文化会館、司会小倉旭会。

○…筑前琵琶橘会全国大会　十月二十三、四日彦根市民会館、司会彦根橘会。

○…琵琶と詩吟詩舞の会　十月三十一日(日)昼西宮市夙川公民館、主催蓮水会、後援一水会神戸支部。会員の外大阪山崎旭萃（厳島の戦）、同小川吟水（巌流島）、新潟樋口禁水（勧進帳）、札幌二反田岳水（新撰組）の諸名士協賛出演。

京絃社電話の局番（85）が九月一日から（73）に変りました。（本番は変更なし）

昭和五十一年十月一日発行（非売品）
編集発行者　植村寞水
発行所　京絃社
〒569 高槻市津之江北町一一ノ三
電話 〇七二六（七三）六〇五一番

三の幕政改革案を提示して奉答を迫り、之を承諾せしめて京都に帰るべくその大名行列が生麦村に差懸った時（文久二年八月二十一日）日本の慣習を知らぬ英国人四名が乗馬のまゝその行列の前面を横切ってしまった。さあ大変な事態である。大名にとっては最大の侮辱行為である。供をしていた藩士奈良原喜左衛門が跳り出て先頭のリチャードソンを斬り、他の藩士も逃れんとする二人に重傷を負わせ、更に乗馬の一婦人は逸散に横浜方面に走り去った。

この急報に英国側は激怒、代理公使ニール中佐をして幕府と薩摩方に厳重なる抗議をなし、幕府に対して謝罪文と十万ポンドの賠償金を、薩摩方には下手人の処刑と遺族扶助料並びに負傷者慰藉料二万五千ポンドを要求して来た。ヘッピリ腰の幕府は渋々ながら之に応じたが、薩藩はこの要求には頑として拒否した。

薩藩に対する未解決のこの事件に対し、英国艦隊司令官キューパー中将はニール中佐を伴って翌文久三年六月二十七日、七隻の艦隊を鹿児島湾谷山沖に単縦陣をもって姿を現した。そして藩に対し昨年来の懸案を、二十四時間の時限付きで回答を迫って来たが、薩藩側は言を左右して拒否する態度に、英艦隊は薩藩の軍艦汽船数隻を拿捕する挙に出た。薩藩も最早や最後の手段に訴える腹を据える。

さてこの時点、東郷少年（十七才）の初陣が始まる。英艦見ゆ!! の急報に藩士達は一斉に勇躍、軽装に身を固めて持場々々の砲台の配備につき英艦を眼下に睨み、砲撃開始の号令を待つ。東郷家に於ては末子の四郎左衛門を除き父子四人の出陣である。父七左衛門は監軍として湾口の山川砲台、長男四郎兵衛、三男壮九郎、四男平八郎は何れも旗本勢として藩主の本営詰めとなり、筒袖の打裂羽織に裁上袴五ツ蔦の定紋打った半首を戴き両刀を帯し、火縄小銃取れる年少の平八郎、凛々しく勇みに勇んで母上に別れを告げ、今将に門を出んとする時母は一言「平八郎よ敗るな!」と初陣の我子に声高く激励したという。

薩摩側の戦闘準備も整い、壮士は皆腕を撫し今か今かと砲撃開始命令を待つうち七月二日となった。キューパー中将は薩摩側が容易に申入れに応ぜざるを悟り、前述の如く薩藩の軍艦汽船の緊急拿捕となり、茲に伝騎は飛び開戦の命令は下った。時正に午刻、前日来の暴風雨である。天保山砲台より一簇の白雲ほとばしると見るまに轟然たる爆音四面にとどろき、続いて各砲台も思い思いの敵艦目がけて撃ち出した。英艦は不意の砲撃にまづバーシューズ号は錨を切って逃れ、ユーリアラスは三発の砲弾を喰って艦長は即死するに至った。英艦はだ捕した汽船を焼き一艦を監視にとどめ、他の六隻は単縦陣となって砲台に肉迫した。薩藩の壮士は赤裸となり褌一本に大刀を打ち込み、大声に叫んで戦う有様は、さながら悪鬼の荒れる如く凄まじき光景を呈した。

男まさりの東郷の母は風雨も弾丸も物ともせず、食糧を携え各陣所を訪づれて、負傷者の手当等大いに士気を鼓舞した。この戦は三日に至って双方根限りの力戦で共に弾薬の欠乏と、英側は修理、石炭、食料と水が尽き果て、四日退却を始め横浜に帰って行った。英側は戦死十三、負傷者五十数人。薩側は鹿児島城下の北部を焼き集成館も破壊、各砲台もアームストロングによって破壊された。（未了）

我が道を行く

六十五年（四二）

西郷天風

温泉浴などには縁の遠い生活の中で育った私は、この東北の温泉地大鰐に滞在して色々を風習を知った。先づ、浴場の入口だけは男女別々ながら、浴室に至れば一個の浴槽を板塀で二分されてはあるものゝ、自由に行き来のできるくぐり戸があり、見るからに豊満な女が男湯の方にやって来て、肌にふれんばかりの誘惑を試みる有様など、殆んど公認とみらるゝのもいかがわしく、入浴に通うのも何となく面映ゆい感じであった。

映画見物から帰った時も、冷えきった身体を暖めようと店の小娘から聞いていた公衆浴場に、只一人静かにぬくぬくと浸っておると、

低地にある此の浴室の軒端と、高い道路との相間からきこえる若い女子達数人の賑やかな声が、どうやら女湯に入る気配がうかがわれ、程なくなまめかしい叫び声と共に何物かで水面を叩く音が聞こえ、数人が一人に追廻される騒ぎのようであった。やがてくゞり戸をあけた一人が、〝誰もいなあい〟と叫びながら、私の頭のうしろを走って左へ曲がり浴槽の縁に立った。

その頃私は「オールバック」から「おかっぱ」風に髪の毛を延ばし初めた時で、うしろからでは女らしくも見える風体だった。それで誰もいないと叫んだのであろう、其声に応じて濡れ手拭を手にした一人に追われ、どやどやと駈け込できた三人が、さながらプールに飛込む時のように浴槽の縁に並びながら、一瞬シーンと静まった。何事かと伏せていた眼をあげて見れば、彼女達は私のチョボ髭に気付いたらしく、しばし唖然として立並んでいる。「それは一糸もまとわぬ自分達を忘れて!!」

ところでモデルの裸婦を飽きる程見馴れて無感覚の筈である私も、此時ばかりは眼を伏せてしまった。己れに返ったはたちそこそこの彼女達も、又濡手拭の一人が叩く水音に追われ、嬌声と共に乱舞する傍若無人の振舞に私は居たゝまれず、折を見てひそかに逃げ帰った。

座敷に上って見れば寝床だけが淋しく敷かれてある八畳の間一杯に、甘づっぱい林檎の香りが充満して、頻りに食欲をそゝる。色あせて萎んだような林檎でも少しは水気があるだろう、と一個を取り二ツに割ってみれば、途端にしたゝる数滴の汁、あわてて口に含めば、その甘味たるやついぞ味わった事のない濃厚な美味に思わず舌鼓を打った。思うにこのうまさは、充分に熟してからもぎ取ったものである為で、林檎畑に遠い都会などでは到底味わい得るものではあるまい。

かくて翌日もその翌日も、寒さ凌ぎの温泉浴に終始し、訪ぬる友もなく、只林檎に親しむ事三日間、その間スケッチ用のブックも絵具も手に入れる術もなきまゝ空費し、乗車切符の日限を幸いに、一月二十五日の午前北海道を目指して大鰐駅を発ち、青森に着いてみれば、青函連絡船まで三時間を待たねばならず、兎も角手荷物を駅に預け駅前の広場に佇んだ時、正面遙かに映画館を発見し、それが松竹系だったので立寄った途端、やあズボ天先生と叫ぶ声と共に映写室から飛出した人物は、かって浜松の松竹館で知った営業主任相沢と云う男だった。

サアサアこちらえと案内しながら、〝よく来て呉れましたねえ、松竹キネマえ談判するつもりで居たところですよ!!〟

彼は、私が松竹キネマから差向けられて来たものと早合点したのだったが、結局、翌々日から此処え出演することになり、函館行は中止のやむなきに立至った。

それは丁度琵琶劇フイルムが配給され、琵琶師が居らぬのにどうしようかと困惑のあまり抗議を申し込んだところたったと云う。しかし今、琵琶の心配がなくなって見れば、今度は逆に礼を正して引続き琵琶劇の配給を要請せねばならぬ破目になったと、相沢氏嬉しい悲鳴をあげながら、宿を吉原遊郭に定め、五人の楽士と共に総勢七名が毎夜押かける事数日、漸く楽長の知人方に下宿することになったのが二月の初めで、それ以来この東北地区に約半年の逗留が決定づけられてしまった。それはこと青森に来て二週目の終り頃、秋田の朝日館から出演の要請があり、館主同士の間で三週間ずつ交替で琵琶劇を上映する事となり、私は秋田の朝日館と青森の松竹館の間を三週間毎に往復すること五回に及んだ。

かくて大正十一年の五月初め、青森の松竹館に出演中の或日、フランスの現代美術展が東京上野の美術館で開催中との新聞記事を発見した。それはフランスの画商デルスニス氏が現代フランスの代表的美術家の作品数百点を持ち来たりて、日本の美術界に大センセーションを捲き起しておると云うのであった。

さあ、此の記事を見た私は矢も楯もためらわず、この絶好の機会を逸してなるものかと急きょ帰京し、先づ何よりも松竹キネマへ挨拶に行けば、会社では半年に亘る東北の僻地で活躍の好果を賞し、大慰安会を柳橋の料亭亀清にもうけた。出席者の中には大歌舞伎の千両役者中村鶴蔵丈を初め、柳橋名妓数十名を含む大宴会となった。

紅涙しぼる
琵琶歌〝巡礼お鶴〟

辻　旭　城

いたいけな巡礼お鶴に紅涙をしぼる。大町桂月先生の傑作琵琶歌〝巡礼お鶴〟に「身の疑いを晴らさんと、心鳴戸の高汐に、ひかる思い後にして、郷土を出でし両親は、刀の詮議捗らず、他国の空に流浪して、苦しき月日過ごせども……。」と唄われている。また浄るり作者近松半二作〝傾城阿波の鳴戸〟の主人公板東十郎兵衛の屋敷跡は、二百四十余年前、即ち享保年間の建物、屋敷内には昔を偲ぶ静かな母家で、阿波の徳島駅前から宮島行きのバスで約三十分の所にある。

板東十郎兵衛は琵琶歌によると、預っていた主家の宝刀〝国次〟を盗まれて之を探し求めるために、三才のお鶴を祖母に預けて、女房お弓と共に諸国に旅立ち、苦労を重ねるということになっているが、実説によると疑問な点がある。

十郎兵衛が仕えていたのは、戦国時代の城主蜂須賀家政で二十五万七千石の大守であった。徳島城跡は徳島公園内の城山の上にあって、石垣、礎石、下乗橋、庭園などが今に残っている。はじめ森飛弾守高次の城であったが、長曽我部元親が之を攻め落とし護っていた。

後に豊臣秀吉が蜂須賀家政に命じて攻略させ、城主となった家政は荒廃した城を大改修し、城域を拡張した。その後徳川氏が没収したが、程なく家政の子至鎮をここに封じ、明治維新まで蜂須賀代々の居城となっていた。

十郎兵衛は阿波の国宮島浦の庄屋の家に生まれた。父が隠居して十郎兵衛を襲名し、宮島浦と鶴島の庄屋として殿より苗字帯刀を許された。資性豪邁にして任侠に富み、藩主より望まれて〝他国米積入れ川口裁判改め役〟の重職を命ぜられた。当時阿波の国は籃作りと製塩の二大産業を奨励したために米が不足し、他国より移入せねばならなかった。

この頃江戸幕府は謀叛を防ぐために兵器、食糧を集める事を堅く禁じていた。これをすれば密輸入となり、十郎兵衛は移入米検査をする役目であったところから、以前より幕府に睨まれていた。

たまたま輸入米の量目や検査について部下の不正が発覚して訴訟となり、藩と幕府に対する立ち場の板狭みとなって、藩も罪状を明らかにすることが出来ぬままに、元禄十一年十一月二十六日十郎兵衛は刑場の露と消えた。

十郎兵衛屋敷の東方約六百米に〝十郎兵衛松〟がある。こゝは科人の刑場があった場所で、十郎兵衛もこゝで処刑されたが、そのころ十郎兵衛に恩顧を受けた人々が、夜陰ひそかにその遺骸を地中深く埋めて、墓標代りに一本の松を植えたのがこの〝十郎兵衛松〟で、高さ約三十米、周囲五米の老松である。

琵琶歌〝巡礼お鶴〟―「徳島城下の十郎兵衛は、わが子と知らず巡礼を、殺して金とる哀れさよ……」お鶴は巡礼姿で父母をたづねての一人旅、まだ九才の幼な児で、四国の或る寺院の門前で母親お弓にめぐり逢い「巡礼にご報謝」と手を出せば、「おお可愛いゝ巡礼の子、定めし連れ衆は親御達？」「いえいえ私は一人旅、父さん母さん顔知らず、逢いたいわいな……」仏門に入っているお弓は親子の名乗りをすることも出来ず、少々の報謝をし涙をかくして別れたわが娘、のび上りすり上り見送ったが、このあと徳島城下で、追剝となっている十郎兵衛が、わが子とも知らずにお鶴を殺して金を奪い取るという、涙ぐましい物語である。

長き恨みの歌

原作　白居易
歌詞　箏曲　秋風の曲
補筆　普門義則
作曲　普門義則

前　謡

○基本吟

地中
(弾)求むれども　地下
尚得難きは

地下　下の下
色になむありける　(弾)
地上　歌地(上)
さりとては　楊家の女こそ

切
まこと妖なるものぞかし　(弾)

本　謡

大干
雲の鬢　花の顔　(弾)
中干(下)　(上)
実に海棠の眠とや　君はまつりごと忘れ
(上)　地
尽日　中干落　離れもやらで眺め明かしぬ　(弾)

地上
魚陽におこりし叛乱の
崩地
大地を動もす陣太鼓　(弾)
干(上)
霓裳羽衣の名曲を
干(上)ハリ
驚かし破りて長安を一挙に目指攻め寄する
干(上)　(弾)
遂に都も危しと
干(下)地廻し　(下)(上)　地
僅かなる供を引具して雨をかして西南へ
心細くも落ちて行く　(弾)

○基本吟

大干
翠の華は揺らぎ揺らぎつ　(弾)
中干　中干落
行きもえやらぬ　地
歌地(上)　鄙の道　(弾)
今日は九重に引替へて　地下
旅寝の空の秋風　(弾)

○吟　替
地ノ一　干
血涙流す悲みも　(弾)　干ノ一(上)
干ノ二　馬嵬の夕べに
蹄の黄埃を吹く風の音のみ残る空しさ　(弾)
吟止

○基本吟
地下
天は変り地は移り　地下ノ下
歌地(上)　潮ぐ乱も治りて
再び春の旋りしが　中切
馭を都へ廻さるゝ　(弾)

○吟　詠
地
帰り来れば池も苑も　皆旧の依なり
太液の　芙蓉未央の柳
干上
芙蓉は面の如く　柳は眉の如し
此に対しては　如何んぞ涙の垂れざらん
干下
春風に桃李の花開く日
秋雨に　梧桐の葉落つる時　地下

○基本吟
地下
南の苑の春は短く　地下ノ下
西の宮に閉されて
地吟
秋草の露繁く　(弾)　歌地上
落つる木葉は階に
中切
積れど誰か払はむや　(弾)

後　謡

地中
鴛鴦の瓦は冷やかに　霜の華のみ重くして
中干流　地上
翡翠の衾ひとり着て　(弾)　地上　止
などか夢をや
結びてむ」　(弾)

（附　言）

白楽天の「琵琶行」と「長恨歌」は共に有名で、日本の文学に大きい影響を与えております。「琵琶行」は琵琶歌として改作され『潯陽江』として愛吟されて居りますが、「長恨歌」は琵琶歌にありません。昨年山田流箏曲「秋風の曲」を聴き、その歌詞が〝長恨歌〟であるので、それにヒントを得て、箏歌を基に白居易の原作の詩を参照して改、増筆、十五分位の演奏時間の琵琶歌を作ったのが、この『長き恨みの歌』であります。基本吟、崩吟替、吟詠の、琵琶歌として大旋律型四ッを

揃えて作曲したので、曲として変化があるようにし、七、五調のリズムを崩さないように努めたので、うたいやすい曲として演奏家に愛吟して頂ければ、作者としてのよろこびでございます。

歌詞は金田一春彦博士に、かなづかい其の他の校閲をしていただきました。（普門）

京絃九月号 〝あとがき〟を読んで

山口　豊水

首記を読んで、思い浮かんだ事をご参考までに申し上げます。

私の勤務先の若い社員（二十―二十五才）十人程と最近会食する機会があった。その時の話の中に、偶然〝琵琶〟と云う言葉が出たので、一同に対して、①琵琶の演奏を聴いた事があるか、②聴いた事のある人は、琵琶に対してどのように感じたか、について質問をしてみた。

その返事をまとめてみると、全然聴いたことなし―四人、一回だけ聴いた―三人、二、三回聴いた―三人という割合だった。但し聴いた事のある人でも、自発的に聴きに行ったのでは無く、友人の親爺がやっているとか云って誘われて琵琶会に行ったというものばかりだった。

そこで、琵琶を聴いてどのように感じたかとたづねたところ、その返事は要約して次ぎのようなものでした。

一口に云えば、どういう事を唄っているのか（何を云っているのか）よくわからない、戦前のような日本歴史は習っていないし、歌詞が文語体であるため意味がわからない。

琵琶という楽器については、形の大きい割合に音が小さいが、音色は大変良い、しかし上手下手はわからないが、リズムに乗らない弾き方の人が多いように思われ、音楽と云うにはどうも……。

結局興味は持てないというのが、若い人の殆んどの受取り方であった。

琵琶関係者がよく云っている琵琶は高尚優美にして格調の高いもの、とは一般人には思われていないようです。

若い人達が琵琶を習らおうとしないのは、歌と弾法を一人でやらなければならないとか、弾法がむつかしいので早く習得し難いからだとか、よく琵琶人から聞いたが、前記のことから考えると、琵琶人が思っていることと、一般の人の考えとには大きな開きがあることがわかります。従って今のように、徳川時代又はそれ以前の出来事のもの、戦国武将を称えたもの、忠君愛国もの、日清日露の戦史もの等だけを唄い続けていては、琵琶は益々若い人達から遠ざかって行くでしょう。

琵琶の振興については年輩琵琶人だけでなく、全く琵琶を知らない高校生、大学生ぐらいの若い人にも聴かせ、その反応を見てよく考えられることが必要であると思います。

平井　洲誠

芳一の曲も央に夕立来る
嵐去る終戦懐古聞く夕べ
戦ものきゝし夜ちゝろ身近にす
羅漢見て下れば かなし蟻地獄
移転先教えられたる暑さかな

京都霊山護国神社慰霊奉納会

毎年行われる首記みたま祭りが今年も残暑厳しい八月十六日に万灯会主催、日本民主同志会提供で京絃社斡旋の芸能奉納会が夕六時から八時まで催され京都琵琶協会、若柳吟社社中、扇谷泉風社中の三団体が協賛して、琵琶三曲（城山―平井春嶺、若き敦盛―梅原旭濤、千曲川―植村寞水）、日舞四題、詩吟詩舞数番が、昼を欺く万灯の神殿に於て遺族や一般参拝者の前で厳粛に奉納された。

当夜は盂蘭盆会（うらぼんえ）の最後を飾る「大文字送り火」が京の夜空を染め七時五十分京の街のネオンが一斉に消されて八時東山如意ケ岳の「大文字」に続き五分間隔で北山の「妙法」、西山の「船形」「左大文字」、

最後に「鳥居形」が順次点火されて、お盆に嵌入りした精霊を極楽浄土に送り返す儀式の巨大な火の絵巻が繰り広げられ街は遠近各地から見物に集った二十二万人の人出で賑った。

東西合同琵琶一泊会

薩摩琵琶四明会、正絃会、鶴絃会の三団体と名古屋の一部琵琶人との合同一泊弾交会は、残暑厳しい八月二十一、二両日に亘って、大津市坂本の西教寺に於て催された。

二十一日十三時五分、国鉄湖西線叡山駅に集合した三十八名の参加者は、四明会の栗本、伊吹、平井三氏より提供の自家用車三台によるビストン運転にて、叡山駅より二キロの西教寺に着いた。

西教寺は、天台真盛宗総本山で、聖徳太子が推古天皇二十六年（西暦六一八年）に仏法の師高麗の僧、恵慈、恵聡の為に創建、大窪山と号したが、天智天皇八年（西暦六六九年）に天皇が丈六の阿弥陀仏像を安置し西教寺の号を下賜、勅額を賜った。

その後平安時代、鎌倉時代を経て室町時代の嘉吉三年（西暦一四四三年）に真盛上人が誕生し比叡山で修学の後、文明十八年（西暦一四八六年）に西教寺へ入寺、不断念仏を始む。比叡山の山徒は西教寺を破却しようと押寄せたが、手白の猿が念仏の鉦を打って寺を護った。御開山真盛上人は明応四年入寂。その後元亀二年織田信長は比叡山とともに西教寺全山をも焼いた。翌元亀三年坂本城主明智光秀は焼失した寺を再建した。天正十年光秀が死し、一族も亡び西教寺に一族とともに葬られた。以上のような由緒ある寺院である。

さてわれわれは開祖真盛上人を祀ってある祖殿にて午後二時半より抽籤順にて弾交を始めた。（真盛老人ホームより多数来会）

乃木静子夫人（佐々木精）、白虎隊（前田絹水）、橘大隊長（小林錦瀞）、菅公（八束一峰）、乃木大将（有馬南城）、千手の前（大富士岳鮮）、鉢の山（山田叢雲）、河内の宿（伊勢谷安江）、菅公（佐野智）、小松の操二段（伊藤鶴麗）、滝口入道（坂本錦道）、吉野の奥（岡部錦蝶）、夢（関口竜城）。

午後六時食堂にてビールを飲み、夕食を終り、入浴をすませて祖殿にて弾交再開。蟬丸城山（三上鶴浄）、蚓蛾（石川昌洋）、雲竜（伊集院鼓城）、物狂（桧木芙代子）、城山の月（川口ひさ江）、桜狩（高林愛子）。

午後九時半第一日を終り、裏書院にて六室に分れ、千草にすだく虫の音を聞きつゝ、さすが夜ともなれば山寺は涼しさを通り越して寒さを肌に感じつゝ就寝。

第二日。五時起床、各室それぞれ芸談や、大正、昭和初期の琵琶界の話などに花が咲き六時半本堂にての勤行に参加、敬虔な態度で仏を拝し、心身清々しくなったところで和尚の説明にて寺内を参観、伏見桃山御殿の遺構に目を見張り、明智光秀一族の墓に詣で、石造二十五菩薩に手を合す。この菩薩の中に一体は袋に入っている細形の琵琶を抱き、又他の一体は薩摩琵琶を抱いている像があり、参加者一様に頭を垂れて祈りを捧ぐ。

朝食後記念写真を撮り、九時より弾交。

川中島（大石晃月）、蒙古来（小野鶴彦）、石田三成の最期（橋谷岳暘）、寂光院（染谷鶴泉）、形見の桜二段（島津天嶺）、時は今也（平井春嶺）、吉田松蔭作辞世（黒田海月）、門琵琶合奏（岡部錦蝶、仲川秀邦、小野鶴彦、柿崎篁峰、平井春嶺）。

以上で二日間の弾交を終る。平井春嶺より閉会の挨拶。辻靖剛の感想、特に芸は人格が顕れるから、琵琶人は人格の向上に努めることを強調。山田叢雲より参加の慶びと感謝の辞。栗本天芳より、自分は九十一才の高齢ゆえ弾奏も思うにまかせないが琵琶を敬愛する心は人後に落ちない、後輩諸君我に続けの力強い挨拶。小野鶴彦より、本一泊会世話役の四明会に対する謝辞および参加者の健弾を祈る万才三唱等あり誠に有意義な一泊会を終了。直ちに食堂にてビールで乾杯し昼食後、昨日同様四明会三氏の自家用車三台のビストン運転にて日吉大社前まで送り午後一時三十分全部の行事を終り、再会を約して解散した。

（平井春嶺記）

藤巻旭鴻演奏会

八月二十九日(日)十一時東京千代田区農協ホール。（第一部）小絃段―会員一同　お蝶夫人―藤巻旭恵・絃旭彰　王昭君―藤巻旭裕、初谷旭憲・絃旭陽、旭史・琴、笛入　衣川―藤巻旭星、清田旭茜、東野旭枝・絃旭鴻　華道華の恵み―古川旭冷・絃旭彰、旭史、旭茜　旭憲・生花三人　羅生門―黒田旭英、古川旭神・絃旭陽　大物の浦―林田旭史、内田旭章・絃旭彰　堅田落―松元旭川、大野旭翠、橋上旭英・絃旭鴻　秋風故郷山―南崎旭薫、石田旭呂・絃旭粧、旭章・笛、立方付　茶道松風の曲―柴田旭容・絃旭薫、旭章、旭裕・琴、点前付　綱舘―藤巻旭陽、藤巻旭彰、藤巻旭鵬・絃旭鳳、旭史、旭桂　対王丸―藤巻旭鴻　琵琶歌謡汐風乙女―藤巻旭裕、初谷旭憲・絃旭粧、旭桂、旭鳳、旭薫、旭史、旭章、小絃旭陽　（第二部）粟津ケ原―押川旭葉　若き敦盛―横野旭鳳・絃旭粧、旭桂、小絃旭陽・立方二、笛入　盛綱先陣―水藤五郎　川中島―大塚岳峻　唐人お吉―富樫旭桂・絃旭鴻、旭薫、小絃旭鳳・笛、立方入　戦艦大和―中